



こうはるとぜんしゆうだいせんかん
耕治人全集 第三卷

一九八九年四月二〇日発行

著者 耕治人

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二

電話東京二五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・牧製本

© 1989 Yoshi Kô

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

耕耘人全集

第三卷

江苏工业学院图书馆
藏书章



晶文社

監修

中川一政

編集委員

本多秋五

紅野敏郎

中島和夫

保昌正夫

村上文昭

題字

中川一政

ブックデザイン

平野甲賀

『耕治人全集』第三卷・目次

春 7

風呂桶 60

一条の光 88

詩人に死が訪れるとき 105

ざぼん 136

てんびん 166

いずみ 192

かたみ 218

中学四年生 247

粘土の上を風が吹く 270

蟻地獄 303

この世に招かれてきた客 335

生きている限り

369

髪床屋

416

同人誌をやっていた頃

447

頭の中の川

462

谷底

491

うずまき

517

二人の兄

551

骸骨踊り

574

解説

中島和夫

615

春

一

運送屋に頼んで夜具や本箱、カンバス、額縁など荷造りして貰った。不用なものは焼き棄てた。そのなかに「赤旗」創刊号や「無産者新聞」があった。それは同級の柴光造から、人に見せてならぬ、秘密にしてくれ、といわれたものだ。荷造りが出来上ると運送屋はリヤカーに積んだ。私は紙屑が散らかった部屋を見廻した。この部屋で三年過ごしたのだ。私は明日熊本市に帰るのだ。

部屋を掃き出してから長い廊下を伝い奥の夫人の居間の前に立ち、襖越しに、

「荷物を出してきますから」と言った。

「いっていらっしゃい」夫人の声がした。

「先生はおいですか」

大友秀芳のアトリエは母屋と離れている。

「さっき出かけましたよ」

用はなかったが、なんとなく私は尋ねたのであった。大友も夫人も、また戻ってきなさい、あの部屋は明けておくから、と言ってくれた。戻ってくるまで荷物は預かって置いてよい、ともいつてくれた。

私は石段の下で待っていた運送屋についてゆるい坂を下り、橋を渡った。両側は遠くまで田圃で、吹きさらしの道に人影はない。上水を渡ると街道で、横切り、商店街を突当ると下高井戸駅だ。そこから渋谷にゆく電車と天現寺にゆく電車が出る。私は天現寺行に乗り、芝のS学院に三年通ったのであった。私は油絵をかいていたのでよく休んだが、文学部長の正田教授は私が二年生になったときクラスから原稿をつのり詩の雑誌を出すことをすすめ、費用を援助してくれたのであった。

私が昨日挨拶にいったら、

「就職試験を受けてゆくといいんだがね」

と言った。正田教授はG出版社を紹介すると言っていたのだ。いまの時期を外せば就職がむずかしいことは分っていた。しかし、たとい合格しても勤めることは出来ないだろう。

妹のヤエ子が発病したのは昨年春で、帰宅をうながす義母の手紙を度々受取ったが、一旦帰ったら、再び上京出来ないように思われたのだ。学業も放擲しなければならぬだろう。たまりかねたように義母は、電報をよこした。それは年が明け、二月に入ってからで、卒業試験がはじまる二日前だった。私は父と実母、長兄と次兄を肺結核でなくした経験から、ヤエ子の病気は一月や二月でどうということがないことを知っていた。そのかわり二年かかるか三年かかるかわからないことも予知して

いたのだ。だから「ヨウタイ　ワルシ　スグカエレ」という義母の電報をそのまま信ぜず、卒業試験だけはすますことにしたのだ。

下高井戸駅で荷物を出し運送屋に料金を払うと、私はほんやり線路の方をみた。夕方までなにもしることがない。

別れの挨拶をしたいと思う人のなかに詩人の千徳宗近がいた。千徳は、詩壇で高い地位を持っていた。千徳を知る前から私は自然発生的に詩を作ったが、千徳を知ってから彼の影響を受けた。千徳は豊島に住んでいるが、大友とは若いときから友達で、大友の紹介で私は千徳を知ったのであった。千徳に対して私はただ熊本に帰るとは言えなかった。千徳に対する私の気持がそれを許さなかった。

ヤエ子と義母は、義母の兄、私にとって義理の伯父の跡見の離れにいたが、ヤエ子が発病すると、家族に伝染するから越してくれ、と跡見から言われたのだ。引越し先があったからよいが、父と二人の兄が相次いで死んだ八代では引越し先がなかったのだ。

私はそんなことは堅く胸にしまっていた。書生とも弟子ともつかず三年を過ごした大友家の人達にも洩らさなかった。義母の電報を受取ってから、大友夫妻に、ヤエ子の看病のため帰らねばならないと言ったのであった。打明けたところで気持のよい話でない。私は自分を呪わしく思っているし、ヤエ子を哀れむより呪いたい気持の方が強いのだ。正田教授に、看病のため帰らねばならないと言ったのも、昨日別れの挨拶をしたときだった。

大友夫人はさっき、「今夜はあなたの好きなものをこしらえるわ。みんな揃ってお別れの食事を楽しみましょうね」と言ってくれた。しかし私は夫人の好意に甘えてならぬと思うのだ。

千徳宗近の家には足が向かない。そのまま大友家に戻る気もしない私は、柴光造の下宿で開かれている秘密な会合を浮べた。切符売場の上の時計をみると、四時二十五分だ。会合は四時から開かれるのだ。会をやめる理由を説明しなければならぬのが気が重く、ゆかないつもりだった。しかし非合法文書の配布を受けているのだから、顔を出さないと警察から調べられたのではないかと、柴は思うかもしれない。時間は遅いが、断ってゆこうと思い直した。

私は目黒駅までの切符を買った。私のクラスは四十人ばかりで半数は卒業後柏木の神学校にゆくのだ。あとの半数は就職希望や上級学校に進むものなどまちまちだ。三年制の私学だから就職はむずかしい。決ったものはいくらもないようだ。帝展審査員の息子という土井はレコード会社にきまったのを得々と教室で話した。顔の造作の大きい丈の高い土井ほど私から遠く感じられるものはクラスにいなかった。そのくせ土井がなにかの折、不意に浮んだ。詩の雑誌をやっていたといえ私には親しい友はなかった。私が絵をかいていることはクラスのものは知らない。正田教授からダンテの「神曲」の講義を受けたので、それから思いついて雑誌の名は「詩篇」とつけた。投稿者は神学生が多かった。投稿原稿はみな掲載したが、投稿者は二十部買わねばならなかった。二月に一冊の割で、七冊出したが、毎号正田教授の長い詩が巻頭をかざった。柴も二三次投稿したことがある。私の詩は感傷的な人道主義的なものだったから、柴がなぜ私を秘密な会合に誘ったかわからなかった。三月ばかり前のことだった、柴が「おれの下宿にこないか」と言ったので、珍しいことがあるものだと思う、ついていったら秘密な配布網のことを聞かされたのだ。私は気が小さいくせ、きっぱり断ることが出来なかった。「詩篇」に投稿したので、断りにくいところもあった。私が神妙に学校の勉強をしたのは一年

生のときだけで、二年生になると学校にいる時間より日比谷の図書館で過ごす時間が多かった。社会科学の本のほかシェークスピア、ゲーテ、ドストエフスキー、トルストイなど読みふけた。学校で習った「徒然草」や「雨月物語」などくらべものにならぬほどの感銘を受けた。

しかしヤエ子のことを忘れたわけではなかった。本を読みふけてるあいだも、ふいに浮ぶことがあった。そんなとき自分が閲覧室にいることも忘れた。ヤエ子と義母は、どうしているだろう。一昨年の夏休みからこっち帰省していない。それまでは正月の休みや夏休みにはきまって帰省したのであった。一昨年の夏休み、義母とヤエ子のよくない噂を耳にした。乱れた生活をかいまみた。義母とヤエ子には、私がいけない方がよいのだと思った。しかし、ヤエ子の発病を知らせてきた昨年の春から、考えまいとしても頭をもたげる。私はすぐヤエ子の許に帰らねばならないと思う。しかし帰ったところでヤエ子の病気がよくなるものでもないのだ。気持をまぎらわせるため、油絵や読書に打込んだ。「詩篇」の編集にも熱を入れた。正田教授が「詩篇」を出すように言ったのは、千徳宗近が主宰している詩誌にのった私の詩をみたからかもしれない。

学校の成績は悪かったが、誰もやかましく言うものにはなかった。柴光造はよく怠ける癖に、一年生のときから一番で通した。柴はそれを少しも鼻にかけず、むしろ小馬鹿にしているところがあった。そんな柴が、私は痛快な気がした。柴の詩は農民の哀愁と激しい労働を歌っていた。イデオロギー張ったところはなかった。一年生のとき軍事教練反対で騒いだときも、二年生のとき社会科学研究会のメンバーが騒いだときも、柴は目立たなかった。柴が共産主義者とは会合に出るまで気づかなかった。主義者でなく同調者かもしれないが、党活動に対する知識の乏しい私には判断がつかない。

目黒駅で降りた私は目蒲線の不動前までの切符を買った。柴の下宿はそこから六七分だ。材木を立てかけたり積んだりしてあるわきにバラックの二階家がある。二階家といっても階下は材木置場になっている。階段を上ると薄暗い部屋に車座になった四人が一斉に私をみた。

「遅かったね。来ないかと思ったよ」

眼鏡の奥の眼を光らせ、柴光造が言った。

「急な用があったから」私はもそもそ言った。柴はそれ切り私を無視して膝の前にひろげた粗末な雑誌に眼をおとし、話を続けた。それは私が焼き棄てた「赤旗」だ。私は明日熊本に帰ることを言いそびれ、柴のうしろであぐらをかいた。私は柴のほかの人達の名を知らず、どこに住んでいるかもしれない。柴は福島県の農村の出で、郷里の人が五反田で経営している病院の事務をS学院に通うかたわらやっていた。しかし横浜の中学校に職がきまってからそこを止めたのだ。柴の口から聞いたのではない。クラスの噂がいつか私の耳に入ったのだ。横浜のその中学はミッシェン・スクールで、正田教授が推薦したということクラスのもの是一種尊敬の気持で話合っていたのは去年のことだ。柴ほどの秀才がどうしてS学院に入ったのか。五反田の病院から近いからか。クラスにはときどき得体のわからぬものがいたが、軍事教練反対を指導した綾部も忘れられない人物だ。綾部がクラスを支配した力は教師より強かった。社研の水間や東や寺本たちは綾部に一目も二目もおいていた。なぜ綾部がそれほど権威があり、その権威を自覚しているか私は不可解だった。綾部の年配も見当がつかなかった。二十七八に見えるし三十を越えているようでもあった。綾部が在学したのは一年ばかりで、二年生になる頃姿を見せなくなった。地下にもぐったという噂がいつか私の耳に入った。地下に共産党が

出来たのは五年ばかり前のことだ。

柴光造が喋っているのは權威ある綜合誌にのつた宮久卓爾の論文のことだ。私もその論文は読んだが、伏字が多いためばかりでなく理解出来なかった。そのため反つて權威があるような錯覚を覚えた。理解出来ないのは私の頭の悪いせいだと思うから、柴たちにそれを知られるのを恥じ、瘦せた蒼ぐろい顔をした柴が圧し殺したような低い声で話すのをもっともらしい顔で聞いた。

宮久卓爾は北陸地方のある大学の教師で文部省からドイツに留学を命ぜられ、共產主義者として帰国し、華やかな活動をはじめていた。そこにはなにか人を酔わせるようなものがあり、水間たちが宮久の論文の一節を口ずさんでいるのを私は聞いたことがあった。宮久の理論には間違いがあると、同じ陣営の人たちから言われたのも去年のことだ。

宮久が党幹部とモスクワに潜行し、コミンテルンの指導者ブハーリンのもとで、討議し、報告を作成した。「ブハーリン・テーゼ」とよばれるその文書の内容は柴から聞いたが、見たことはなかった。柴は、宮久卓爾の理論が「ブハーリン・テーゼ」以後どう変ったか、その論文をもとに解説しているのだが、どこがどう変ったのか、非論理的な私の頭の頭は理解出来なかった。

柴の話の合間に口を挟むものがいた。年齢はみな同じくらいだ。柴の話が終るとズボンに素足の、髪毛をもしゃもしゃした男が部屋の隅の畳を起こした。畳には縁がなく、ふくらんだような感じだ。その男は畳の下から「無産者新聞」を取出し、柴に渡した。

柴が一部ずつ配った。

「次の会合は来月の六日ということにしよう。それまで赤旗の次号が出来るはずだ。君は来るだろう

ね」

そういつてはじめて柴は私を振向いた。

「ぼくは明日国に帰るんだ。おふくろから電報がきて、支度があつて遅れたんだ」

柴は私をその会合に誘ったとき、学院の方では従来通りの態度でいてくれと言った。それをよいことに熊本に帰ることを黙っていたのだ。

柴がきびしい眼で私をみて、

「どれくらいいるのかね」

「わからない。親父も兄貴もいないから、ぼくが家の用をいろいろしなくちゃならないから」

「ぼくは当分ここにいるつもりだ。ここから横浜に通うつもりだ。しかし手紙はよきさない方がいいね。東京に出てきたら寄ってみてくれ」

それで会は終った。ヤエ子の病氣のことを言う必要がなかったので、私はほっとし、挨拶をせず階段を降りた。それはいつものことだ。あとに残った人達のあいだでなにか話合いがあるのか、それとも一人ずつ間を置き眼立たぬように帰ってゆくのか。彼等のなかでS学院のものは私と柴だけだ。

小さな町工場の多いごみごみした裏通りを歩きながら私は前後に気を配った。会合に出るようになってから黒い服にサーベルをつけた警官を私は特別な眼でみるようになった。会合というより細胞というべきだろう。三年前治安維持法が出来た。法律にうとい私だが「無産者新聞」を持っているだけで逮捕されるかもしれないことを知っていた。「赤旗」も「無産者新聞」も店頭におくことが不可能な状態だから秘密な配布網によらねばならないのだ。その組織はどうなっているか、柴は配布の組織

を作るよう命令されたのだろう。命令したものは上部の組織だろう。その組織が水間たちとなんら連絡がないらしいのも私には謎だ。水間たちは彼等の組織を持ち、配布しているのだろうか。私は二年生のとき水間たちからドン・キホーテと罵られたことがある。柴もその場にいたはずだ。

不動前で切符を求めホームに入ると緊張がゆるんだ。社会科学の本は、文学書ほど私の頭に入っていない。なぜ私のようなものを柴は引き入れたのか。その理由を尋ねてみたいと思うことがあった。柴たちは世の中から貧乏や不正をなくするため一身を犠牲にしている。警察はいつ彼等を検挙するかわからない。私は、父や兄の病気のため不当にしいたげられた。そこに一脈通ずるものを私は感じたのだ。それに、その会合がなんとなく原始基督教徒の秘密な会合をしのばせるのだ。私はS学院に入ってから聖書の講義を受けたが、原始基督教徒は圧迫され生命の危険にさらされながら洞窟でひそかに会合し信仰を守ったのであった。天井の低い、薄暗い柴の部屋がなんとなくその洞窟を想像させるのだ。宗教を阿片だといっている柴たちがそれを知ったら、資本主義にとって都合のよい奴隷の道德と、おれたちの科学的な思想を混同するなというにきまっている。柴は私をこてんこてんにやつけるだろう。

封建主義の残滓を根絶し、ブルジョア民主主義革命を遂行しなければならない、そのとき社会主義革命が達成される。革命の客観的条件は存在するのだ……宮久卓爾の論文を解説したあと、柴がいった言葉が恐ろしい響きで私の耳に残った。幾度か聞いたことのある「ブハーリン・テーゼ」の結論が、私には肌で受け止められなかった。どこか空疎な感じはまぬかれないのだ。

電車は目黒駅についた。そこから十五分ばかりでS学院にゆける。もうS学院をみることも柴たち